

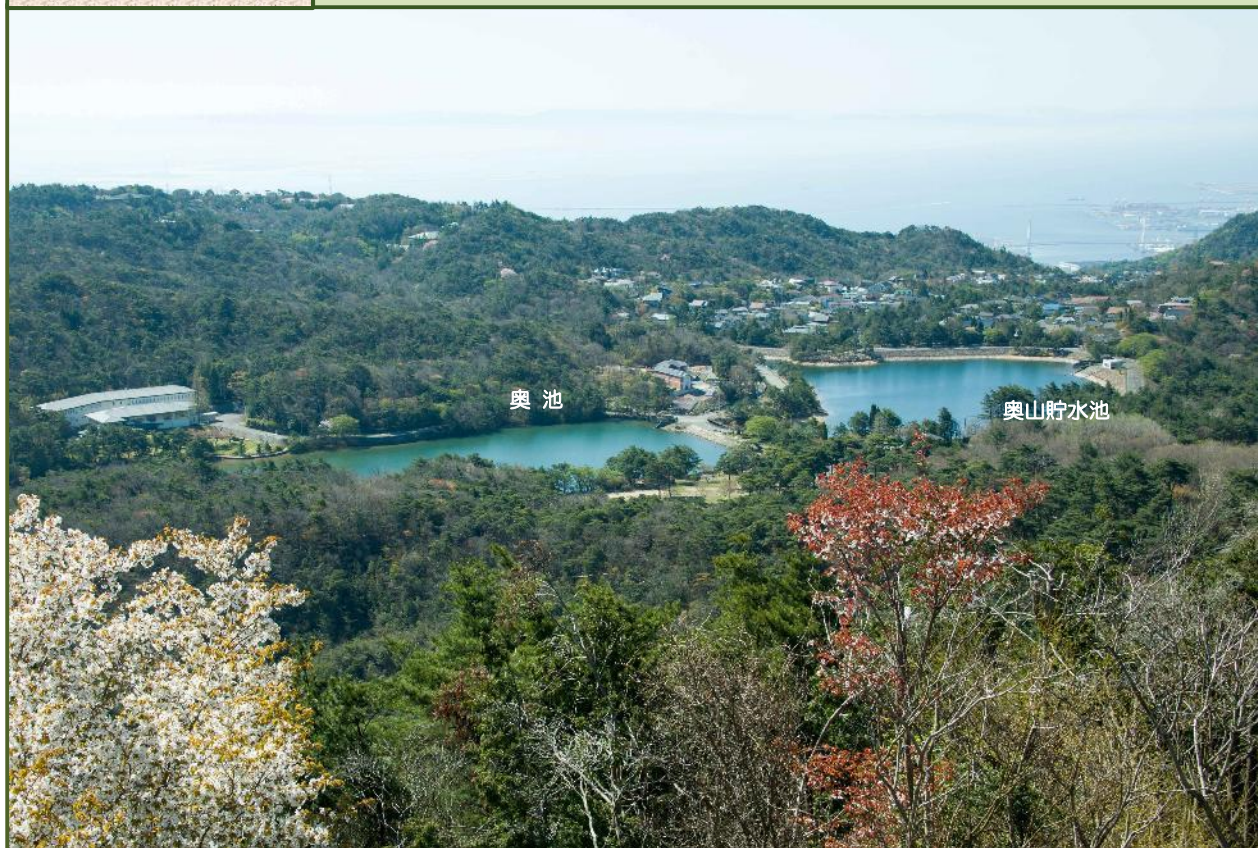


写真-1 東六甲展望台から奥池および奥山貯水池を撮影（令和3年4月）

### ■ 芦有ドライブウェイの東六甲展望台がビューポイント

写真-1 は、芦有ドライブウェイの東六甲展望台から奥池（写真-1 左側）および奥山貯水池（写真-1 右側）を撮ったものです。4月上旬の日曜日9時過ぎに展望台駐車場に着きました。40台分の駐車スペースがあるので余裕で停められると思っていたら、何とほとんどポルシェで埋まっていた。後で調べてみると、ポルシェの集いの場になっているとか。駐車場の隅っこに車を停めました。居心地がよくなかったので早々に写真を撮って奥池に向かいました。

奥池は元々「奥山溜池」と呼ばれていて、芦屋村の年寄（庄屋の補佐役）だった猿丸又左衛門安時（1804～1880年）が、田畑の水不足をなくすために天保12（1841）年から築造に取り掛かり、約20年の歳月を費やして完成させた農業用溜池で、容量は約80千 $\text{m}^3$ 、満水面積は約3.8haです。



写真-2 奥池（洪水吐付近から撮影）



写真-3 奥山貯水池（第2ダムから撮影）



また、奥池の下流側に位置する奥山貯水池は、芦屋市が水道水源とするために昭和 46（1971）年 3 月に完成させたもので、有効容量は約 346 千 m<sup>3</sup>、満水面積は約 4.6ha です。

### ■ 芦屋川筋の水事情

天正 17（1589）年、芦屋村が定めた『芦屋川水日数定』によると、芦屋川にはすでに 3 ヶ所の用水取水堰が設置されていたそうです。一の井手は、川西一帯の村々の用水源で、後に東川用水一の井手と称され、本庄 5 ヶ村（三条・津知・森・深江・中野）80 町歩の田地を灌漑する重要な取水口でした。二の井手、三の井手は、芦屋川の東に展開する芦屋村の取水口でした。

芦屋川沿川地域の農業はもっぱら流水に依存しており、溜池はこれを補充するためのものだったようです。田畑の多くが土砂交じりの土で水持ちが悪く、水不足から頻繁に水争いが起きていました。

### ■ 苦しい時の神頼み～「弁天岩とフカ切り岩」の雨乞い神事

阪急芦屋川駅から芦屋川に沿って北へ約 1.5km の水車谷バス停で降りて、一般県道 344 号奥山精道線の急坂を 1.4km ほど行くと道端に「弁天岩」と呼ばれる大きな岩が鎮座しています（写真-4）。

そして、そこから約 50m 先の川中に小さな滝があり、そこに上面が長方形の大岩が横たわっています（写真-5）。この岩は、「まな板岩」あるいは「フカ切り岩」と呼ばれています。

この二つの岩には下記のような話が伝えられています。

日照りが続くと村人は「弁天岩」にお祈りをします。弁天さんは水の神様です。しかし、それでも雨が降らないときには、雨乞いの神事を行います。芦屋沖から大きなフカ（大型のサメ類の俗称）を捕まえてきて「フカ切り岩」の上でさばき、その流れ出た血を「弁天岩」に塗り付けるのです。フカの血で汚された神様は立腹し、たちまち黒雲を湧き出させて大雨を降らせ、この汚れを洗い流してしまうとか。

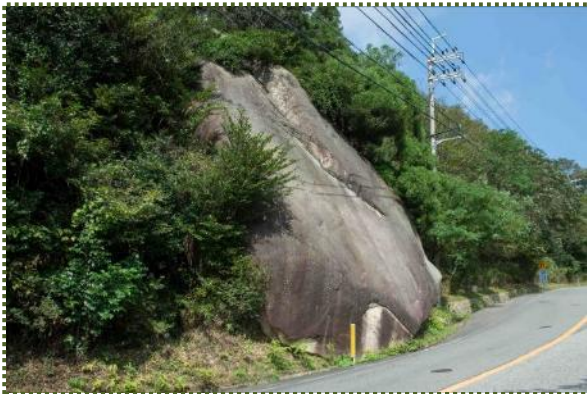


写真-4 弁天岩



写真-5 フカ切り岩

### ※ 現物を見た感想

・**弁天岩**：見た目は一枚岩の花崗岩に見えますが、向こう側から側面を見ると、表の岩の裏に 2 枚の岩が隠れています。この 3 枚の岩は元々 1 枚の岩だったものが、何らかの理由で 3 枚に割れたものと思われます。表の岩は、高さが約 8m ありますが、3 枚の岩の高さは 15m ほどあるように見えます。

・**フカ切り岩**：今のフカ切り岩は、上面の長辺が 4m、幅が 2m ほどあるので、平均的な大きさのフカ（1～3m）なら十分に載せるだけの広さはあります。ただ、上面が少し傾いてしまっているので、この状態ではフカを載せてさばくことはできません。

### ■ 芦屋川と住吉川で「ドビワリの水争い」

奥池築造の契機になったとされる「ドビワリの水争い」について、『芦屋の生活文化史』からその概要を紹介します。

「ドビワリ」は芦屋川と住吉川の流域界にある峠の名称で、西隣の住吉川流域（現・神戸市東灘区）との間に起こった水争いが地名の由来となっています。

文政 10 (1827) 年 6 月、この地方はひどい干ばつに見舞われました。そこで下流の打出・芦屋の村人は水源を調べに川を遡っていくと、シノキ山 (現・東おたふく山) の西側の谷を流れる住吉川がかなりの水量を有しているのを見ます。

村人は、住吉川の水を芦屋川へ引き込もうと謀り、峠にドビ (土樋: 土管) を通して芦屋川の右支谷である蛇谷に流し取りました。

一方、住吉川の水量が急に減水したことから不審を抱いた下流域の人たちは川を遡り、シノキ山の北の峠で土樋を見つけます。知らせを受けた住吉川下流の 6 ケ村 (住吉、魚崎、横屋、田中、野寄、岡本: いずれも現・東灘区) の村民は激怒し、血気にはやる若者は峠へ登って土樋を粉々に打ち壊しました。

打出・芦屋の両村は土樋を壊されたことを大坂町奉行所に訴え、地頭下げ (多分、領主預かりの意味) となりますが争論は収まりません。

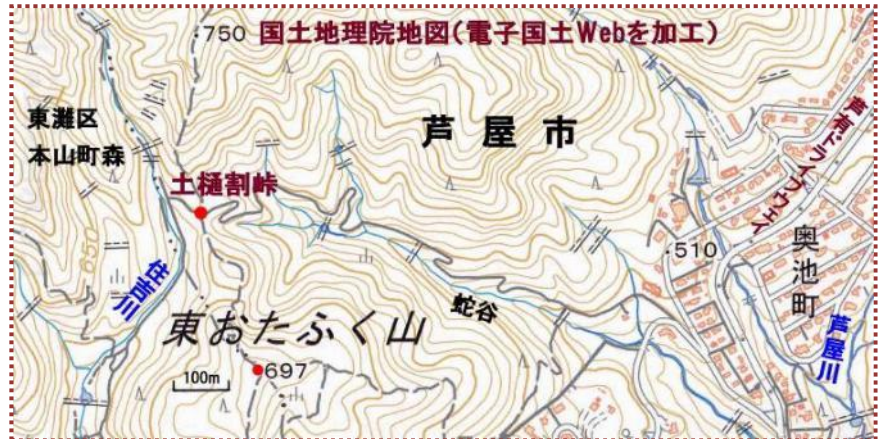


図-1 土樋割峠および蛇谷付近の地図

そこで芦屋村など天領 6 ケ村を支配する京都代官・小堀主税 (正芳) から尼崎藩 (野寄村と岡本村は尼崎藩領) に掛け合いの上、関係する 8 ケ村を呼び出し、それぞれの用達 (出入りの商人) 5 名を仲介者として話し合った結果、今後、打出・芦屋の村人は住吉川から決して引水をしないこと、この度の破壊行為に関しては、住吉川下流の 6 ケ村は賠償金として銀五貫<sup>※1</sup>を払うこと、打出・芦屋の両村は、その銀を元にして溜池を築き水不足に備えること、以上の 3 条件で和解が成立しました。奉行所に和解成立が報告されたのは文政 10 (1827) 年 11 月のことでした。

因みに、この争論に関係した 8 ケ村のうち、野寄村と岡本村を除く 6 ケ村は「明和 6 (1769) 年の上知<sup>※2</sup> (あげ、じょうち)」により尼崎藩領から天領になっています。

**※1 銀五貫:** 江戸時代、銀貨は主に西国の下級武士・商人が使っていた。銀一貫は千匁。江戸時代中後期において金一両は銀貨六十匁に相当し、金一両は現代では約 75,000 円。よって銀一貫は、75,000 円×1,000 匁÷60 匁=1,250,000 円 したがって、銀五貫は 625 万円に相当する。

**※2 明和 6 年の上知:** 明和 4 (1767) 年長崎奉行・石谷清昌が長崎から江戸へ帰る途次、命じられて摂津・河内を巡見し、灘地方の酒造地帯の豊かな風景をみて、その公収 (天領とすること) を幕府に進言した。それにもとづき、明和 6 (1769) 年 2 月、武庫郡今津村から八部 (やたべ) 郡兵庫津までの海岸部の 3 郡 24 ケ村が公収された。尼崎藩は高 1 万 4 千石余りを公収され、播磨 (多可・穴栗・赤穂の 3 郡) に替え地を与えられたが、豊かな地方の公収は財政的に大きな打撃となった。このことは、大坂城の西の守りの尼崎を弱体化する暴挙であり決して幕府の利益にならないと、幕吏の中から反対の建白が出た。

## ■ 芦屋村の年寄・猿丸安時、奥池を築く

「ドビワリの水争い」から 14 年が経過しました。銀五貫で溜池を築いていたかどうかはわかりませんが、相変わらず芦屋村近郷の各村では水不足に悩み、芦屋川からの取水を巡って水争いが絶えない状況にありました。この問題を解決するために、芦屋村の年寄だった猿丸又左衛門安時は、溜池を築くことを決意します。

### ① 奥池周辺の地形・地質

奥池が築造された場所は、周囲を山に囲まれた盆地状の地形で、多くの湧水が流れる低地や湿地があり、溜池の立地条件に恵まれていたと考えられます。

図-2 の「芦屋川上流域の地質図」からわかるように、奥池の北西を北東から南西方向に延びる五助橋断層<sup>※3</sup>が通っています。この断層破砕帯の粘土層が不透水層を形成し、降水がこの層で堰き止められ、それが多くの湧水となって流出していると思われます。

Gr : 六甲花崗岩 (黒雲母花崗岩)  
Gp : 花崗斑岩  
Ou : 大阪層群上部亜層群  
Om : 大阪層群中部亜層群  
Ol : 大阪層群下部亜層群  
Tsh : 丹波層群チャート・チャート優勢層



※3 五助橋断層：六甲山地の南麓を北東から南西方向に延びる逆断層である。六甲・淡路島断層帯の主要断層のひとつで、断層の北側が隆起する右横ずれの活断層である。

六甲山主稜線の南側は、海側より芦屋断層、五助橋断層、大月断層が並行して存在し、階段状地形となっている。

断層名は、かつて存在した住吉川上流にあった五助橋に由来する。五助橋は、五助堰堤のある所から、少し上流側に設けられていた橋で、今は廃橋となっており跡地は五助堰堤の堆砂敷に埋没している。

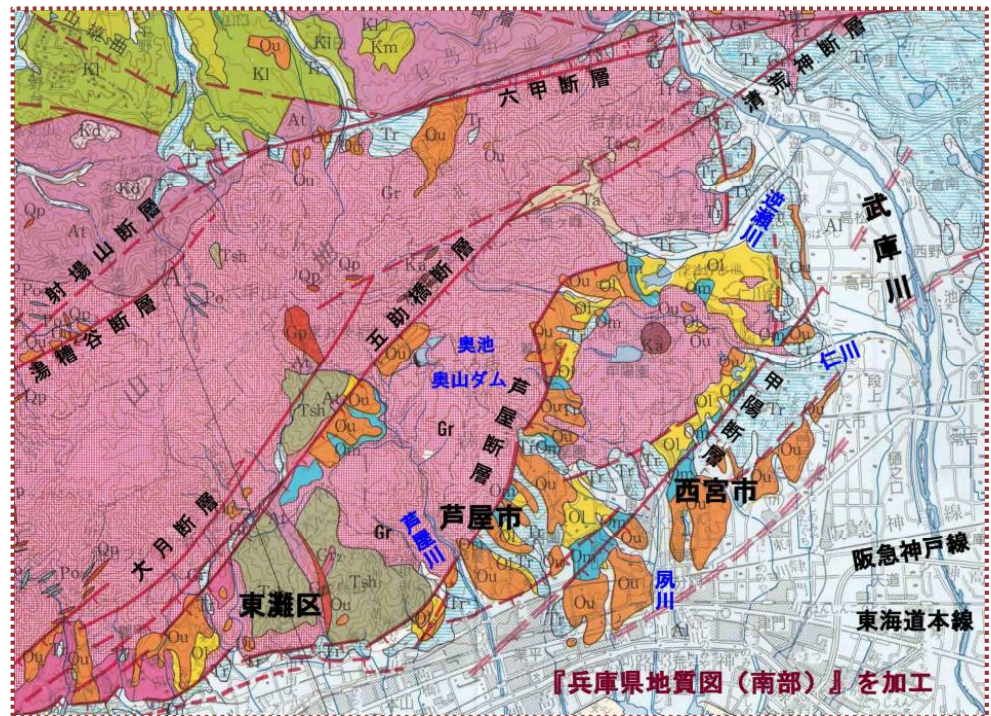


図-2 芦屋川上流域の地質図

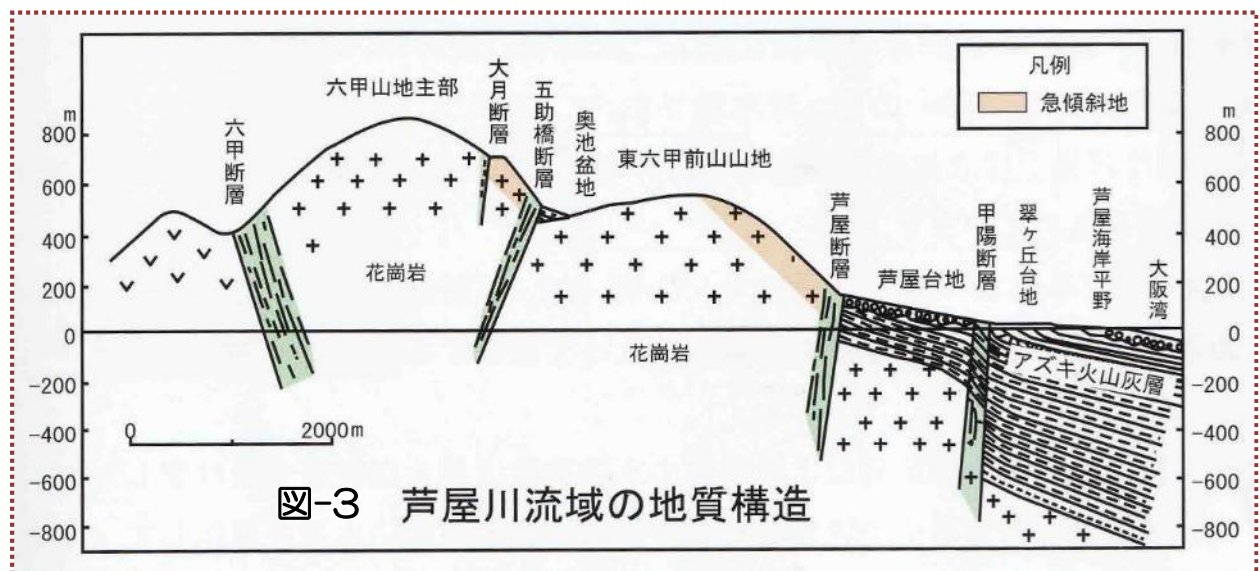


図-3 芦屋川流域の地質構造

(『芦屋川の水』から引用)

## ② 奥池の開削

地形・地質的に優れた池床を選定したのはさすがですが、大変なのは池の開削・築造工事です。

安時は、自分一人だけでは工事をすることが出来ないの、村人たちにも参加を呼び掛けます。村人たちも自分たちのためでもあるので、ボランティアで工事に参加しますが、それぞれに日々の生活があり、田畑も耕さなければなりません。工事に携わることができるのは、おそらく農閑期だけと思われます。加えて、標高 500m 付近にある工事現場までの往復が大変です。今の開森橋から奥池までの距離が約 6km、上りはきついでと歩くと 2 時間あまりかかります。帰りは下りですが疲れているのでやっぱり 2 時間かかったかも。(馬があったら楽だろうと思いますが、この時代、お百姓さんが馬に乗ることは禁じられています)

朝、8 時に現場に向かい、夕方 4 時に家に帰るとすると 8 時間ですが、現場との往復に約 4 時間かかりますから、昼食や休憩時間を 1 時間差し引くと実労働時間は 3 時間しかありません。

山裾を削り、削った土を盛り立てて堤防を造る土工事は、それこそ機械のない時代ですから人海戦術です。1 日 3 時間の実作業で、農閑期だけの作業であれば、谷を堰き止めるまでに 20 年あまりの歳月を要したのも理解できます(お疲れ様でした!)



### ③ 奥池堤防上に石碑を建立

奥池洪水吐の北西側堤防上に石の祠と花崗岩の石碑があります。石碑には、下記のような文言が刻まれています。

**奥池水神社**

天保十二年ここ奥山に猿丸安時は治水のため谷をせきとめ辛苦二十余年を要してこの池を築造しここに祠を建て水神を祀り末永く池の安全を祈る



写真-6 猿丸安時翁  
(六甲砂防事務所HPから引用)

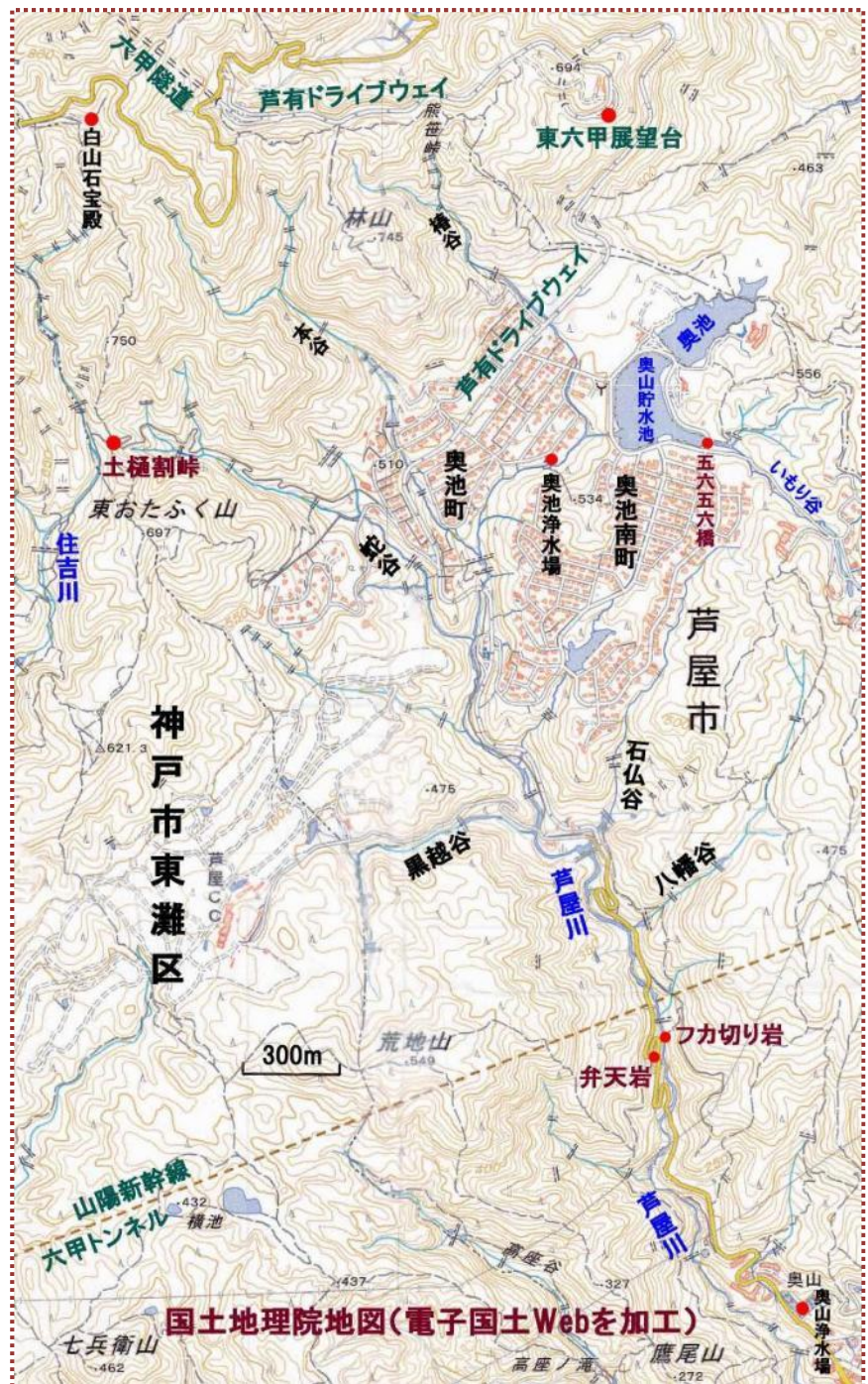


図-4 芦屋川上流域の地図

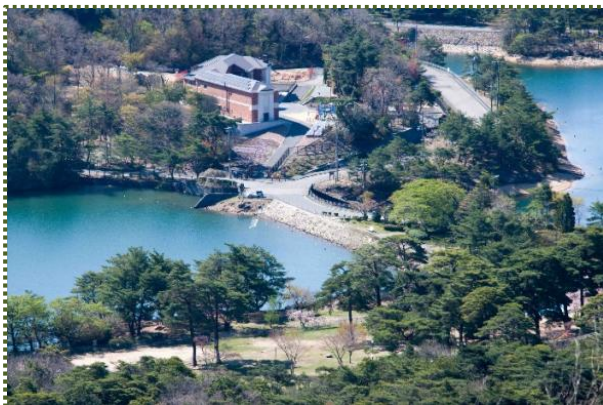


写真-7 左：奥池、右：奥山貯水池



写真-8 奥池水神社の祠と石碑、向こうに見える水面は奥山貯水池



## ■ 猿丸安時翁を顕彰

芦屋川に架かる開森橋の左岸袂付近に「猿丸翁頌徳碑」(写真-9)が建っています。大正5(1916)年に建立されたもので、石碑には右のような碑文が刻まれています。

なお、写真-9の頌徳碑の向こう側に見える石碑は「細雪」の碑、左側の細いサクラの木は「潮見桜」です。



写真-9 猿丸翁頌徳碑

### 猿丸翁頌徳碑

津乃国蘆屋の里に猿丸安時翁といふあり 家世々村長なり  
天保十二年翁の世と為るや 古来この地方の災害たる蘆屋  
川乃水を治めむことを志し 池溝をけずり堤防を築き辛苦  
二十年餘りにして其の目的を達せり 此を以て災害一朝  
にして除かれ人仰ぎて神と称せり 翁明治十三年七十七歳  
にて没しぬ 村人敬慕の餘り碑(いしぼり)を建てて長く其  
の功を伝えんとす 抑も(そもそも)翁は歌人猿丸大夫の裔なり  
翁の如きは遠祖の嗜(この)みし歌道の誠を心として世  
を濟(すく)う道に尽くされたものと言うべし 嗚呼今より  
後も大夫の歌と共に功德の世に仰がることは蘆屋川の  
萬代に絶えざる如きものあらむ

大正五年十一月

従一位勲一等侯爵 久我道久 篆額

従六位 池辺義象 撰文並書

## ■ 猿丸安時と猿丸大夫の関係は？

「百人一首」の中に猿丸大夫の有名な句があります。

奥山に もみじ踏み分け鳴く鹿の 声聞ときぞ 秋は悲しき

猿丸大夫は三十六歌仙の一人で、生没年不明。「猿丸」は名、大夫は五位以上の官位を得ている者の称。第43代元明天皇の時代、または元慶(かんぎょう)年間(877~885)頃の人物ともいわれていますが、伝承は全く不明です。さらにその出自についても、山背大兄王(やましろのおおえのおう)の子で聖徳太子の孫とされる弓削王(ゆげのおおきみ)とする説、天武天皇の子・弓削皇子(ゆげのみこ)とする説や道鏡説、また民間伝承では二荒山(ふたうさん)神社の神職小野氏の祖である小野猿丸とする説など諸説あります。この猿丸大夫と猿丸安時はこういった関係があるのでしょうか。

猿丸安時の子・安道の後裔とされている猿丸誠三氏が書かれた『芦屋猿丸家と猿丸大夫の謎』によると、芦屋の猿丸家は火事に遭い、ほとんどの資料が燃えてしまったということで、猿丸家についての詳しい資料は残っていないそうです。

『用明帝裔氏族綱要』より、用明天皇の子の聖徳太子(厩戸皇子)、その次に山背大兄王、その子供が弓削王で、この方が猿丸大夫とされています。

芦屋猿丸家系図によると、安土桃山時代の天正17(1589)年に猿丸又左衛門と猿丸吉左衛門に分かれ、双方が交互に東芦屋猿宮(芦屋神社)に奉職していたといわれています。誠三氏の先祖は代々猿丸又左衛門と名乗り、安時の子・安道の後裔だそうです。



写真-10 「猿丸大夫」

狩野探幽筆「三十六歌仙額」より

## ■ 奥池は昭和初期から芦屋市の上水道水源に転用

明治38(1905)年に阪神電鉄の大阪~神戸間が開通し、阪神芦屋駅と打出駅が開設されます。大正2(1913)年には国鉄芦屋駅が、大正9(1920)年には阪急神戸線が開通し芦屋川駅が開設されました。

一方、これに呼応して精道村の山手から海浜部まで土地区画整理がなされ、六麓荘や松風山荘など民間による住宅地開発も行われました。

神戸や大阪へのアクセスが飛躍的に便利になった住宅地に、神戸や大阪の人々が健康的な住環境を求めて移り住んだ結果、優れた郊外住宅地として急速に発展し、農村だった精道村は阪神間随一の高級住宅街に生まれ変わります。

水田の宅地化に伴い灌漑用水の需要が大きく減少するとともに、上水道の需要が急増します。このため、農業用溜池として造られた奥池を水道水源として活用するとともに奥山浄水場（緩速ろ過方式）などの水道施設を整備し、村営水道が水道水供給を開始したのは昭和 13（1938）年からです。奥池は、集水面積が約 18ha と小さく満水に長時間を要するとともに容量も約 8 万 m<sup>3</sup> と小さく水道水源としては脆弱でした。

### ■ 芦屋市が、奥池直下に水道用貯水池を建設

芦屋市の水道は、昭和 10（1935）年、武庫郡精道村内に点在していた約 20 ヶ所の小規模な簡易水道を統合した村営水道に始まります。奥池を水道水源に転用するとともに奥山浄水場（緩速ろ過方式）などの水道施設を整備し、村営水道が水道水供給を開始したのは昭和 13（1938）年からで、昭和 15（1940）年の市制施行により芦屋市水道となります。

戦後の急激な人口増加や生活様式の向上により、市の水需要量は年々増加し、施設能力を超過するようになったことから阪神水道企業団からの受水で賄うようになります。

一方、芦屋川の上流域では奥池周辺部の開発が行われ、開発地区の水道水源を確保するため、奥池に隣接して奥山貯水池を築造し、併せて奥池浄水場（急速ろ過方式）を整備しました。

奥山貯水池は、椿谷と池の谷合流点近くに築く第 1 ダムと洪水吐南に築く第 2 ダム、さらに奥池の旧堤改築によって 346 千 m<sup>3</sup> の容量を確保しています。そして、池の谷からの流水と椿谷取水口からの導水（ヒューム管内径 1.2m）も貯水するようにしています。

ダムの型式は、中心コア型アースダムで、第 1 ダムは堤高 23.4m、堤頂長 186m、堤頂幅 10.0m、第 2 ダムは堤高 10.4m、堤頂長 101m、堤頂幅 10.0m で、昭和 44（1969）年 3 月に着工、昭和 46（1971）年 3 月に完成しています。



写真-11 奥山貯水池

### ■ モノローグ

明治 22（1889）年 4 月、芦屋村・打出村・三条村・津知村が合併して精道村が発足します。この「精道」という村名は精道小学校の校名に由来し、その校名は、明治 19（1886）年の開校の際に、西宮の漢学者・豊田政苗が「養精修道」という言葉から名付けたといわれています。

そして、昭和 15（1940）年 11 月 10 日、精道村は市制施行により芦屋市になります。「芦屋」を市名にしたのは、精道よりも大字名となっていた「芦屋」の方が全国的に知られていたからだとか。ただ、「芦屋」という地名は、葦でつくった粗末な家が点在していたことに由来するそうです。そんな地域が、今は豪邸が立ち並ぶセレクトな街になっていて、まさに隔世の感があります。

#### アセビ（馬酔木）

ツツジ科アセビ属の常緑低木。有毒植物であり、葉を煎じて殺虫剤に利用される。多くの草食哺乳類は食べるのを避ける。馬酔木の名は、「馬」が葉を食べれば毒に当たり、「酔」うが如くにふらつくようになる「木」という所から付いた名前であるとされる。ニホンシカが忌避する植物のため、シカの生息密度が高く食害を受けやすい森林では、アセビをシキミなどとともに混植する試みが行われたことがある。早春、枝先に 10cm ほどの複総状の花序を垂らし、白いつぼ状の花を多くつける。奥池園地に咲いていた。



写真-12 アセビ

【参考資料】

- 1 『新修芦屋市史・本編』 芦屋市 昭和 46 年 11 月
- 2 『芦屋市史・本編』 芦屋市教育委員会 昭和 31 年 11 月
- 3 『芦屋郷土史』 細川道草編著 昭和 38 年 11 月
- 4 『芦屋の生活文化史』 芦屋市教育委員会 昭和 54 年 3 月
- 5 『芦屋川の水 バンフレット』 芦屋市上下水道部
- 6 『関西文化研究会～芦屋猿丸家と猿丸大夫の謎』 猿丸誠三 平成 28 年 10 月
- 7 『兵庫のため池誌』 兵庫県農林水産部農地整備課 昭和 59 年 3 月
- 8 『五助橋断層、五助堰堤、元明天皇、元慶年間、尼崎藩、菟原郡、京都代官、大坂町奉行、サメ、猿丸大夫、アセビ』  
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 9 『度量衡講座 11～銀一貫、一匁っていくら？銀貨の換算』 古文書ネット
- 10 『西摂農村の経済発展と明和 6 年尼崎藩領上知』 Web 版図説尼崎の歴史
- 11 『明和 6 年の上知』 Web 版尼崎地域史事典『apedia』
- 12 『ひょうごの地名』 吉田茂樹 昭和 58 年 3 月

※発行：令和 4（2022）年 2 月 『ひょうご水百景』 No.142

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.142